

# 第 1 1 回 2 階線形微分方程式 – 同次方程式の解法

理学部 齊藤国靖\*

2023 年 4 月 5 日

1 階線形微分方程式の解き方を踏まえ、2 階線形微分方程式の解き方を学ぶ。特に、定数係数の場合に限定し、まずは同次方程式の解き方について説明する。定数係数の 2 階線形微分方程式が同次方程式であれば、特性方程式を用いる方法が最も強力である。

## 1 2 階線形微分方程式

次の微分方程式

$$\frac{d^2y}{dx^2} + p(x)\frac{dy}{dx} + q(x)y = r(x) \quad (1)$$

は 2 階線形微分方程式であり、非同次項が  $r(x) = 0$  であれば同次方程式、 $r(x) \neq 0$  であれば非同次方程式である。同次方程式のうち、関数  $p(x)$ ,  $q(x)$  が定数の場合、式 (1) は

$$\frac{d^2y}{dx^2} + a\frac{dy}{dx} + by = 0 \quad (2)$$

となり、これは定数係数であるという。式 (2) は最も基本的なタイプの 2 階線形微分方程式である。

### 1.1 特性方程式

式 (2) を解くため、解の形を

$$y(x) = e^{\lambda x} \quad (3)$$

と仮定する。これを式 (2) に代入すると、各項は

$$\frac{d^2y}{dx^2} = \lambda^2 e^{\lambda x}, \quad a\frac{dy}{dx} = a\lambda e^{\lambda x}, \quad by = be^{\lambda x}$$

と計算できるので、

$$(\lambda^2 + a\lambda + b)e^{\lambda x} = 0$$

となる。但し、 $e^{\lambda x} > 0$  なので、上式が成立するには

$$\lambda^2 + a\lambda + b = 0 \quad (4)$$

---

\* k.saitoh@cc.kyoto-su.ac.jp

でなければならない。式(4)は式(3)で導入した $\lambda$ に関する方程式であり、**特性方程式**と呼ばれる。特性方程式は2次方程式なので、解の公式を使って解くと

$$\lambda = \frac{-a \pm \sqrt{a^2 - 4b}}{2} \quad (5)$$

となる。つまり、

$$\lambda_1 = \frac{-a + \sqrt{a^2 - 4b}}{2}, \quad \lambda_2 = \frac{-a - \sqrt{a^2 - 4b}}{2}$$

とすれば、式(3)より、 $y(x) = e^{\lambda_1 x}$  と  $y(x) = e^{\lambda_2 x}$  が式(2)の解であることが解る。

ところで、 $c_1, c_2$  を定数とすれば、 $e^{\lambda_1 x}$  と  $e^{\lambda_2 x}$  の線形結合

$$y(x) = c_1 e^{\lambda_1 x} + c_2 e^{\lambda_2 x} \quad (6)$$

も解である(実際に代入して確認せよ)。式(6)は任意定数を2個含むので、2階微分方程式(2)の一般解である。しかし、 $\lambda_1, \lambda_2$ の性質によっては一般解にならない場合もある。 $\lambda_1, \lambda_2$ の性質は**特性方程式の判別式**  $D \equiv a^2 - 4b$ によって決まるので、以下、 $D$ について場合分けして考えよう。

### 1.1.1 $D > 0$ の場合

$\lambda_1, \lambda_2$ は異なる実解である。このとき、 $e^{\lambda_1 x}$  と  $e^{\lambda_2 x}$  は一次独立であり(後述)、式(6)が一般解となる。

### 1.1.2 $D < 0$ の場合

$\lambda_1, \lambda_2$ は複素共役である。 $p, q$ を实数として、

$$\lambda_1 = p + iq, \quad \lambda_2 = \lambda_1^* = p - iq$$

とすると、式(6)は

$$\begin{aligned} y(x) &= c_1 e^{(p+iq)x} + c_2 e^{(p-iq)x} \\ &= e^{px} (c_1 e^{iqx} + c_2 e^{-iqx}) \end{aligned}$$

となる。ここで、オイラーの公式

$$e^{\pm iqx} = \cos qx \pm i \sin qx$$

を代入すると

$$y(x) = e^{px} \{(c_1 + c_2) \cos qx + i(c_1 - c_2) \sin qx\} \quad (7)$$

となり、これが一般解である。

1.1.3  $D = 0$  の場合

$\lambda_1, \lambda_2$  は重解である。重解を  $\lambda \equiv \lambda_1 = \lambda_2$  とすると、式 (6) は

$$y(x) = (c_1 + c_2)e^{\lambda x} \equiv Ce^{\lambda x}$$

となる。但し、 $C \equiv c_1 + c_2$  とした。これは任意定数を1個しか含まないから、2階微分方程式 (2) の一般解にはならない。そこで、一般解を求めるため、任意定数  $C$  を関数  $C(x)$  として定数変化法を使う。 $y = C(x)e^{\lambda x}$  を式 (2) に代入すると、各項は

$$\frac{d^2 y}{dx^2} = \left( \frac{d^2 C}{dx^2} + 2\lambda \frac{dC}{dx} + \lambda^2 C \right) e^{\lambda x}, \quad a \frac{dy}{dx} = \left( \frac{dC}{dx} + \lambda C \right) a e^{\lambda x}, \quad by = C b e^{\lambda x}$$

と計算できるので、

$$\begin{aligned} \left\{ \frac{d^2 C}{dx^2} + 2\lambda \frac{dC}{dx} + \lambda^2 C + \left( \frac{dC}{dx} + \lambda C \right) a + C b \right\} e^{\lambda x} &= 0 \\ \therefore \frac{d^2 C}{dx^2} + (2\lambda + a) \frac{dC}{dx} + (\lambda^2 + a\lambda + b) C &= 0 \end{aligned} \quad (8)$$

となる。ここで、 $\lambda$  は特性方程式 (4) の解なので、第3項の係数はゼロである。

$$\lambda^2 + a\lambda + b = 0$$

また、特性方程式 (4) の解と係数の関係から、

$$2\lambda = -a$$

なので、第2項の係数もゼロである。つまり、式 (8) は

$$\frac{d^2 C}{dx^2} = 0$$

であり、これを解いて  $C(x) = c_1 x + c_2$  と求めることができる。但し、 $c_1, c_2$  は新たな積分定数である。よって、重解  $\lambda_1 = \lambda_2 = \lambda$  の場合の一般解は

$$y(x) = (c_1 x + c_2)e^{\lambda x} \quad (9)$$

である。

## 1.2 例題：抵抗力が働くときのバネ振動

速度に比例した抵抗力が働くときのバネ振動の方程式

$$\ddot{x} + \nu \dot{x} + \omega^2 x = 0 \quad (10)$$

を解け。但し、 $\nu, \omega$  は定数とし、初期条件を

$$x(0) = x_0, \quad \dot{x}(0) = 0$$

とせよ.

式 (10) は定数係数の 2 階線形微分方程式であり, 同次方程式だから, 解を  $x(t) = e^{\lambda t}$  としして代入すると, 特性方程式

$$\lambda^2 + \nu\lambda + \omega^2 = 0 \quad (11)$$

が得られる. そこで, 判別式  $D = \nu^2 - 4\omega^2$  によって場合分けをする.

a)  $D > 0$  の場合

特性方程式 (11) は異なる実解

$$\lambda_1 = \frac{-\nu + \sqrt{\nu^2 - 4\omega^2}}{2}, \quad \lambda_2 = \frac{-\nu - \sqrt{\nu^2 - 4\omega^2}}{2}$$

をもつ. これらを

$$\gamma \equiv \sqrt{\frac{\nu^2}{4} - \omega^2}$$

を用いて書き換えると,

$$\lambda_1 = -\frac{\nu}{2} + \gamma, \quad \lambda_2 = -\frac{\nu}{2} - \gamma$$

となる. よって, 式 (10) の一般解は

$$\begin{aligned} x(t) &= c_1 e^{\lambda_1 t} + c_2 e^{\lambda_2 t} \\ \therefore x(t) &= (c_1 e^{\gamma t} + c_2 e^{-\gamma t}) e^{-\nu t/2} \end{aligned} \quad (12)$$

である. 式 (12) を  $t$  で微分すると

$$\dot{x}(t) = \gamma (c_1 e^{\gamma t} - c_2 e^{-\gamma t}) e^{-\nu t/2} - \frac{\nu}{2} (c_1 e^{\gamma t} + c_2 e^{-\gamma t}) e^{-\nu t/2}$$

なので, 初期条件より,

$$\begin{aligned} x(0) &= c_1 + c_2 = x_0 \\ \dot{x}(0) &= \gamma(c_1 - c_2) - \frac{\nu}{2}(c_1 + c_2) = 0 \end{aligned}$$

を得る. これらを  $c_1, c_2$  について解くと

$$c_1 = \frac{x_0}{2} \left( 1 + \frac{\nu}{2\gamma} \right), \quad c_2 = \frac{x_0}{2} \left( 1 - \frac{\nu}{2\gamma} \right)$$

なので, これを式 (12) に代入して答えを得る.

b)  $D < 0$  の場合

特性方程式 (11) は複素共役の解

$$\lambda_1 = -\frac{\nu}{2} + i\Omega, \quad \lambda_2 = -\frac{\nu}{2} - i\Omega$$

をもつ。但し,

$$\Omega \equiv \sqrt{\omega^2 - \frac{\nu^2}{4}}$$

とした。よって, 式 (10) の一般解は

$$\begin{aligned} x(t) &= c_1 e^{\lambda_1 t} + c_2 e^{\lambda_2 t} \\ \therefore x(t) &= e^{-\nu t/2} (c_1 e^{i\Omega t} + c_2 e^{-i\Omega t}) \end{aligned} \quad (13)$$

である。オイラーの公式を使えば,

$$x(t) = e^{-\nu t/2} \{ (c_1 + c_2) \cos \Omega t + i(c_1 - c_2) \sin \Omega t \} \quad (14)$$

となる。式 (13) を  $t$  で微分すると

$$\dot{x}(t) = -\frac{\nu}{2} e^{-\nu t/2} (c_1 e^{i\Omega t} + c_2 e^{-i\Omega t}) + i\Omega e^{-\nu t/2} (c_1 e^{i\Omega t} - c_2 e^{-i\Omega t})$$

なので, 初期条件より,

$$\begin{aligned} x(0) &= c_1 + c_2 = x_0 \\ \dot{x}(0) &= -\frac{\nu}{2}(c_1 + c_2) + i\Omega(c_1 - c_2) = 0 \end{aligned}$$

を得る。つまり,

$$c_1 + c_2 = x_0, \quad i(c_1 - c_2) = \frac{\nu}{2\Omega} x_0$$

なので, これを式 (14) に代入して,

$$x(t) = x_0 e^{-\nu t/2} \left( \cos \Omega t + \frac{\nu}{2\Omega} \sin \Omega t \right) \quad (15)$$

が答えである。

c)  $D = 0$  の場合

特性方程式 (11) は重解

$$\lambda_1 = \lambda_2 = -\frac{\nu}{2}$$

をもつ。このとき, 一般解は

$$x(t) = (c_1 t + c_2) e^{-\nu t/2} \quad (16)$$

である。式 (16) を  $t$  で微分すると

$$\dot{x}(t) = c_1 e^{-\nu t/2} - \frac{\nu}{2} (c_1 t + c_2) e^{-\nu t/2}$$

なので, 初期条件より,

$$\begin{aligned} x(0) &= c_2 = x_0 \\ \dot{x}(0) &= c_1 - \frac{\nu}{2} c_2 = 0 \end{aligned}$$

を得る。つまり、

$$c_1 = \frac{\nu}{2}x_0, \quad c_2 = x_0$$

なので、これを式 (16) に代入して、

$$x(t) = x_0 \left( \frac{\nu}{2}t + 1 \right) e^{-\nu t/2} \quad (17)$$

が答えである。

(補足) バネ振動の方程式 (10) は、特性方程式 (11) の判別式  $D = \nu^2 - 4\omega^2$  の値によって異なる解をもつ。例えば、 $D > 0$  の場合は

$$D = \nu^2 - 4\omega^2 > 0, \quad \therefore \omega^2 < \frac{\nu^2}{4}$$

なので、バネの固有振動数  $\omega$  が  $\nu/2$  よりも小さければ、式 (12) の様な振動しない解が得られ、これを過減衰という。逆に、 $\omega$  が  $\nu/2$  よりも大きければ、式 (15) の様に振動しながら減衰する解が得られる。また、 $\omega = \nu/2$ 、つまり  $D = 0$  の場合は式 (17) が解であり、振動しない場合とする場合の境い目にあり、臨界減衰と呼ばれる。この様に、バネ振動の方程式 (10) の解は、固有振動数  $\omega$  や抵抗係数  $\nu$  の大きさが決まってはじめて求まるのである。

### 1.3 演習

次の2階線形微分方程式を解け。

(1)

$$\frac{d^2y}{dx^2} - 2\frac{dy}{dx} - 3y = 0$$

(2)

$$\frac{d^2y}{dx^2} - 6\frac{dy}{dx} + 9y = 0$$